

## 橋詰せみ郎の家なき幼稚園から

福元真由美

はじめに

自然というのは、幼児期の子どもにとって欠くことのできない教育的な環境だと考えられている。ひとりひとりの子どもが、身近な動植物や自然現象にどのように興味、関心をもち、探求心を働かせていくか、そ

こで保育者が、どのように子どもの自発的な活動を大切にしていくかは、幼児教育において重視されている観点である。さらに、自然というものが幼児教育の用語として積極的に使用されるにすぎない、自然への関心や配慮を無視した保育は、非教育的で改善されなければならぬという問題を生むまてになっている。

このように、幼児教育に自然を分かち難く結びつけていく認識は、日本の伝統的なものというよりも、大正期というある歴史的な時点で強く主張され、全国的に宣伝、普及されたものといえる。今回とりあげる橋詰せみ郎（本名 良一、一八七一一一九三四年）の家なき幼稚園（一九三二年設立）は、大正後期から昭和初期にかけて、保育における自然教育の流行ともいえる現象を生じさせ、多くの教育関係者の注目を集めた幼稚園である。家なき幼稚園は、はじめから「家」<sup>サト</sup>園舎をもたずに、幼児たちを周囲の川や森に連れ出し、自然の中で保育することを特徴としていた。

家なき幼稚園の自然教育が興味深いのは、明治末期から大正期の、大阪における郊外住宅地の成立と密接に関係しているからである。一九〇九年、箕面有馬電気軌道（阪急電鉄株式会社の前身、以下箕面有馬電鉄）の専務取締役小林一三は、日本で最初に、大阪市内に通勤する給料生活者向けの沿線郊外住宅地を開発

した。大阪市外の西北に位置する、家なき幼稚園の設立された池田室町は、その翌年に行われた第一回目の分譲地である。橋詰の自然を重視する幼児教育は、郊外住宅地という新たに形成された都市空間において生み出され、さまざまな実践の様式により演出されたのである。以下では、橋詰が、郊外住宅地の成立とあいまって、幼児教育における自然の重要性を主張した経緯と、家なき幼稚園の自然教育の特徴についてみていこう。

#### 郊外住宅地の成立と家なき幼稚園の設立

小林は、富豪向けの高級別荘地としてではなく、都市部のより所得の低い給料生活者を対象に、彼らの生活意識に見合う郊外型の生活空間をつくらうとした。箕面有馬電鉄の宣伝する郊外の自然景観は、それ自体が、都市部の住民には接近しやすい観光地的魅力をもち、自然と触れあう生活のイメージを喚起するもの

だった。小林は、一九〇九年発行のパンフレット「住宅地御案内」で、自然の豊かな「田園趣味」に富み、家庭での「慰安」を保障される「模範的新住宅地」として、この地を宣伝した。<sup>注2</sup>小林の目指す理想的な「郊外生活」は、それが拒否しようとした、劣悪な環境で非衛生的、非人間的な大阪市内の工業地域との対比で把握されている。

池田室町は、大阪の新中間層に属する人々が、自然との一体感、家庭生活の充実を理想とし、その実現に向けて努力する場となった。<sup>注3</sup>池田室町で買収した二万七千坪の土地に、二〇〇戸ほどの屋敷を建設した小林は、我が国初の月賦制住宅ローン方式を販売に取り入れ、ほぼ完売させている。ここに移住した人々の職業は、医者、銀行・商社のサラリーマン、画家、音楽家、大学教授、弁護士、学校の教員などが多い。<sup>注4</sup>大阪毎日新聞社の事業部長だった橋詰も、一九一二年に、小林のすすめで妻や子どもと移住した。箕面有馬電鉄

発行の『山容水態』（一九一五年）には、郊外に移住した人々の動機や移住後の健康状態、子どもに関する質問の回答が掲載されている。彼らは、「家族の健康」や「園芸の趣味」、自然への敬愛のために「不潔なる市街を避け」て移住し、帰宅すると「気分が一新する」「精神上何となくゆつたりした気分」になるという。<sup>注5</sup>彼らは、これまでの都市生活から、自然と融合した幸せな家庭生活を求めて郊外へ移住し、自らが理想とする生活の実現しつづけることを実感していたのである。

橋詰は、一九二二年の家なき幼稚園の開園に先立ち、池田室町の家々に次のような幼稚園設立趣意書「『家なき幼稚園』の発起」を配布した。

「広い広い自然を占有している郊外住宅地の人々が大阪あたりの真似をして窮屈な家を建てることから手を着けなければ幼稚園が出来ないように考えるのは詰ま

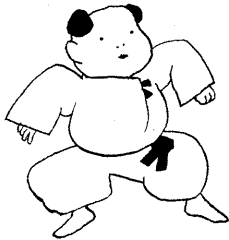
らないことだと思えます。

工夫のつけかたによつては『家なき学校』でも立派に出来るものだと考えて居ますが、保育にあつては特に『家なき幼稚園』が自由で、簡単で、愉快だと思われ<sup>注</sup>ます。」

大阪との対比で郊外の価値をうたい、「自然をそのままの保育室に」という発想をもつ幼稚園は、自分たちの生活欲求を満たす教育を求めて郊外の住民を駆り立てた。このため、園児の募集に、最初二〇人の予定が、実際は六〇人の申し込みがあつたという。橋詰は、この家なき幼稚園の園長を務め、続いて宝塚、箕面、十三、雲雀ヶ丘、大阪（一九二四年）、千里山（一九二五年）に、あわせて六つの家なき幼稚園を開園している。

郊外の人々を魅了した自然の教育は、園舎をもたない幼稚園の日々の保育活動そのものから生み出される

ものだった。幼稚園の保育項目は、「歌えば踊る生活」「お話をする生活」「お遊びをともにする生活」「回遊<sup>マユ</sup>にいそしむ生活」「手技を習う生活」「家庭めぐり」の六つである。自然の教育を特徴づける「回遊」は、橋詰によれば「自然に親しむ」「自然を観察」するため、保育者が幼児を連れ歩き「石つみ」「魚つり」「水あそび」「土ほり」「草つみ」「虫とり」「鳥の声を聞く」の活動をさせることである。<sup>注</sup>毎朝、集合場所の呉服神社の境内に集まった後、保育者と幼児は、ござ、組み立て机、折り畳み式の椅子、乳母車に取りつけたオルガンなどを持ち運び、付近の猪名川、大光寺の森、城山の野原などに出かけて活動している。雨や猛暑の日には、神社の絵馬堂を借りていた。



## 家なき幼稚園における自然の教育

### 橋詰の幼児教育論における自然

このように幼稚園から戸外に出て、幼児を自然に親しませる活動は、家なき幼稚園だけでなく、ほかの幼稚園にも取り入れられていた。大阪の愛珠幼稚園をはじめ、「郊外保育」「園外保育」は、すでに明治期の幼稚園でもしばしば行われていた。大正期になると、幼児の直接経験を広めることが再認識され、「郊外保育」がよく行われたほか、園芸や動物の飼育を通じて、自然界のことを談話に取り入れる試みもなされた。<sup>註7</sup>

これに対し、家なき幼稚園の保育実践が興味深いのは、それが、保育における人間と自然との関係について、ほかとは異なる認識により支えられていた点である。著書『家なき幼稚園の主張と実際』（一九二八年）において、橋詰は、「人と人との相互生活の基調を整える」ために、「自覚、自省、自営、互助、互楽」す

る「子供同士の世界」<sup>註8</sup>が必要だという。そして、この「世界」をつくるのに「大自然」が「最もよい所」<sup>註9</sup>だとしている。この「自然の子供の国」は、保育者と幼児とが「自然に相触れ」ることにより、「相互愛」を「発露」させ、これを基盤とした関係を生成させる空間として捉えられた。<sup>註10</sup> 保育者の葛野宣子は、橋詰の設立した姉妹学校の機関誌『愛と美』（一九二七年一月号）に「おのずと歌に」と題した保育日記をのせ、次のような幼児のやりとりを記している。

「君ちゃんが『先生、この野菊、こないになって泣いてなさる』といいました。『どんなに』と見ると、花弁が半分ほど落ちて本当にしよんぼりして居ました。春ちゃんが大きい色の白い菊を摘んで『これはお嫁さんよ』といいました。すみちゃんが色の濃い花をとって『これは娘さんヨ』といいました。私が、しおれて縮んだ花を見て『これはおばあさんヨ』といいます

と、雪ちゃんが「これここに泣いて居るのがあるワ」といいました。君ちゃんが又小さい蕾を見つけて「こんな、赤ちゃんが」と嬉しそうに見せに来ます。「ほんに、イーベビちゃんネ」「先生、ベビちゃんて赤ちゃんのこと」「そうヨ、ベビちゃんがだんだん大きくなってネ、幼稚園へ来てネ」と話しながら（幼児の摘んだ花を束ねながら、保育者は園歌を口ずさむ 筆者注<sup>注10</sup>）

「泣いている野菊」という「君ちゃん」の物語は、保育者に花が「本当にしょんぼりして」いたと感じさせ、しおれた「おばあさん」の花を発見させた後、「雪ちゃん」に「泣いて居る」花の物語の世界を開かせた。一方、花が「お嫁さん」「娘」になる物語は、保育者に摘んだ花を見せる行為を通じて、「君ちゃん」の物語へと引き継がれていく。幼児や保育者たちが、自然を媒介にお互いの物語を交換し共有しあう関係

が、ここでは成立していたといえるだろう。いまだ人為的努力のみられない状態において、自然な憐憫のうちに、人間が内発的に共感し、隣人と同一化していく世界が描かれている。家なき幼稚園にとって自然は、幼児や保育者の共感や共同性にもとづく生と矛盾しない、これを妨げる障害の取り除かれた場として想定されていたのである。

#### 自然教育の演出と宣伝

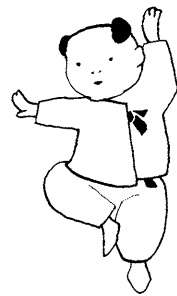
橋詰の、幼児が自然の中で共同性を編みあげる教育のイメージは、「家なき」であつてこそ、日常的に現実化されていく感覚を抱かせるものだった。しかし、家なき幼稚園は府の認可を得るために、園の名称や設備を変更せざるを得なくなった。一九二九年、大阪家なき幼稚園が、幼児を郊外に連れていくために使う自動車の特税を申告するために、「幼稚園令」の定める設備を整え、府の認可を得る必要が生じた。そこで、

園舎を建てて、同年一〇月に大阪のみ自然幼稚園と改称することになる。<sup>註11</sup>一九三〇年には箕面、翌年には池田を含む四園が、府の認可をえて自然幼稚園と改称された。

橋詰は、各園が自然幼稚園として開園するたびに、改名披露のため、全園合同で「自然物手技」の展覧会を開催した。「自然物手技」とは、例えば、ドンダグりを頭に、木の葉を着物に見立てた人形のような、自然物を材料にした製作品である。初めての展覧会（一九二九年一〇月）で、保育者たちは、集まった親や教員関係者に、普段の遊戯の見学が無理なら自然物の製作品だけでも見てもらおうと、会場の保育室を製作品で埋めつくした。<sup>註12</sup>「自然恩物手技」は、具体的な製作品を通じて、自然を用いた幼児教育の価値を人々に提示するものであった。だがその一方で、幼児が保育者や仲間と共同性を編む場として、自然を捉えようとする意識は、製作品の展示という行為からは捉えにくく

なつたといわざるをえない。

このような家なき幼稚園における自然教育の変化



は、どのような方

法で「自然物手技」を宣伝し、その教育的価値をいかに演出するかという課題を生じさせた。「自然物手技」の宣伝の方法として最も利用されたのは、雑誌や放送というメディアの活用である。一九三〇年発行の『愛と美』（六月号）は、「自然の恩物号」として自然物の製作品について特集し、翌年の同誌七月号から一二月号では、春と秋に行う「自然物手技」の作品の材料と作り方が、図柄入りで説明された。一九三〇年七月三日には、ラジオの子ども向け番組で、橋詰と保育者が「こんな手技を御存じですか」と題し、テキストを用いて、自然物での自動車や蝶、兵隊の作り方を教え

ている。同年一〇月に名古屋で開催された第五回全国幼稚園関係者大会では、橋詰たちが「自然恩物の手技創作」という発表を行い、その翌日には、名古屋放送局から「自然恩物手技」の放送をこなした。

さらに興味深いのは、大阪三越という百貨店における「自然物の子供手細工展覧会」の開催である。これまで、展覧会は幼稚園の保育室で行われていたが、一九三一年以降は、この百貨店の六階を会場にしている。毎年一月中旬に三日間開催され、親子連れ、学生、教育関係者らが千数百人も来観し、第二回以降は、各園の保育者がパンフレットも作成して製作品の説明にあたった。当時の会場の写真や橋詰、保育者らの記述によると、画用紙に木の葉で人物や車を型どった作品が会場の壁面を埋めつくし、陳列台には、松かさや木の実、果物を材料にした動物園や大演習の模型などが並べられている。この展覧会は、教育的効果があるとみなされた自然の一部を製作品としてカタログ

的に提示し、来観者に「此の自然を要素」として幼稚園のつくりだした教育の世界、および教育のスタイルを示して、その普及、拡大をはかろうとするものであった。<sup>13</sup>

### おわりに

郊外住宅地では、現実的な生活の理想郷を求めて移住した人々が、幼稚園の新しい受容層となった。家なき幼稚園は、こうした人々の欲求や価値観を表現する教育の新しい形式を、高度なメディア文化と、家庭や娯楽への欲求を満たす消費空間とを媒介に創造していったといえる。幼児教育において自然を重視する言説と実践は、以後も、賀川豊彦の松沢幼稚園などにみられるように、郊外を舞台に大量に生み出されていった。新しい郊外住宅地が次々と開発されていく現在において、郊外に成立した幼稚園、幼児教育についての歴史を見直していくことは、今日につながる問題に通



じていくことになるのではないだろうか。

——終——

(東京大学大学院)

注

- 1 橋詰は、一八七二年兵庫県尼崎市に生まれ、神戸師範学校を卒業してから、大阪市の小学校の訓導を務めた。一九〇六年に大阪毎日新聞社に入社し、一九二〇年に初代事業部長となる。
- 2 「住宅地御案内」、箕面有馬電気軌道株式会社、一九〇九年(所収小林二三『小林二三全集』第一卷、ダイヤモンド社、一九六一年)
- 3 ルイス・マンフォード『都市の文化』、丸善、一九三八年
- 4 池田市史編纂委員会『池田市史第五卷 民俗編』池田市、一九九八年、七五七、七五八頁
- 5 『山容水態』、箕面有馬電気軌道株式会社、一九一五年、一〇一―一五頁

6 橋詰せみ郎『家なき幼稚園の主張と実際』東洋図書株式会社

資社、二五頁、一五二―一五四頁

7 日本保育学会『日本幼児保育史』第三卷、フレール館、

一五五―一三二五頁

8 橋詰、前掲書、三、四頁

9 同右、七―一頁

10 葛野真子『おのずと歌に』『愛と美』第一卷一月号、姉様

学校、一九二七年、一五頁

11 橋詰「自然幼稚園になるまで……家なき幼稚園から……」『愛

と美』第三卷一月号、前掲書、一九二九年、二二、二

三頁

12 森垣操子「初めての展覧会」、同右、一九一三〇頁

13 橋詰「第二回の幼児手細工展を大阪三越に開催して」『愛

と美』第七卷一月号、前掲書、一九三三年、一八頁